

● シリーズ 私の見た日本 Vol.162

前衛さと懐かしさが共存する日本建築

包 慕 萍 (パオ・ム・ピン)

1994年中国上海同济大学建築・城市規劃学院建築歴史と理論専攻を修士修了。中国瀋陽建築工程学院建築系の講師を経て来日。2003年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、博士(工学)。2007年～東京大学生産技術研究所協力研究員、法政大学デザイン工学部兼任講師。2003年博士論文が井植記念第2回「アジア・太平洋研究賞」受賞。著書：『モンゴルにおける都市建築史研究』2005年、藤森照信、増田彰久と共著『近代建築のアジア』2013・2014年など



外国ににいるのに、ある風景を目の当たりにして、懐かしいと感じたことはありませんか。

このような体験は、だれしも一度や二度はあるかと思う。日本人であれば、海外の都市で、日本ではもう見かけることがない古い日本車がすいすいと走っている光景を見て、懐かしいと感じるだろう。私の場合は、アジアの住宅地を調査する際、街角で見かけた子供の遊ぶ道具が自分の子供時代に遊んでいた道具と重なり、懐かしいと感じて、子供たちの様子を目を細めて追ったことがしばしばあった。恩師の藤森先生の定年退官講演会では、アジアの近代建築を足で調べた30年間の体験談をいろいろと聞くことができた。中国山東省煙台市の外国人居留地を初めて見た時のことに触れ、それを見て発した第一声は「懐かしい」だったそうだ。おそらく、藤森先生が長年をかけて、追いかけて来た近代建築に対するさまざまな感情が、この景観により呼び起こされて、懐かしいと感じたのであろう。

自国なのか、外国なのか、場所はどこであれ、懐かしいという気持ちは、見かけた風景と自分の経験が重なるからこそ、呼び起こされる感情であろう。一国の風景や町、建築が、より多くの国の人々に懐かしさを感じさせることは、その国の文化の豊かさの証であろう。

私の場合は、初めて奈良の法隆寺を見た日のことが忘れられない。建築史研究のため、東京大学の博士課程に入学したばかりの時だったが、法隆寺の金堂、五重の塔を見た途端、感激で涙が溢れた。建築を見て泣いたのは、この時が初めてだった。建築の美しさに感動したのはもちろんですが、それだけではない。法隆寺の建物をまの当たりにして、自分のこれまでの様々な思い出が走馬灯のように頭の中を駆け巡った。修士入試の時に法隆寺の試験問題が出されたこと、教壇で中国隋唐建築を説明する際、当時なかなか手に入れられなかったボロボロの法隆寺

のモノクロ写真を学生に見せたら、学生たちが喜んでくれたことなどなど、懐かしい思い出が蘇った。だからこそ、初めて見たのに懐かしかったのだ。

日本の古代建築を見て懐かしいと感じる人は私だけではない。実際、中国大陸の人々は、よく奈良の古代建築の姿から、中国の隋唐時代の古代建築に思いを馳せる。中国建築史を専門にする人々はおさらである。奈良や京都は「中国古代建築の博物館」とさえ思ったりしている。もちろん、建築史専門家であれば、日本の古代建築は中国大陸から体系的に影響を受けたとしても、その後日本化されていることは承知の上である。とは言え、中国大陸から見渡せば、日本の古代建築が最も親しみやすいことは間違いない。そこには、日本に古いものがよく残されていることへの羨慕な念が見え隠れしている。私の修士課程の指導教官である路秉傑先生は、かつて東京大学に留学していたが、帰国時の送別会で、「中国文化は古く、日本文化は悠久である」との感想を述べたという。その真意は、中国では遺跡を発掘すれば、いくらでも古いものが出てくる。しかし、現代まで残されたものはごく僅かしかないのだ。確かに、中国文化の最盛期と謳歌される隋唐時代の建物は、現在2棟しか残されていない。それは山西省五台山に立地する南禅寺大仏殿(782年建立)と佛光寺東大殿(857年建立)である。その中で、奈良の法隆寺金堂と同等規模の佛光寺東大殿は、金堂より、250年も後世のものである。また、生活面から言えば、現代中国では伝統的な生活様式がほとんど伝承されていない。一方、日本では、世界最古を誇る木造建築である法隆寺金堂が現在もなお存在している。また、建築だけに留まらず、現代生活の衣食住のすべての面において、古いものが脈々と現代まで受け継がれている。和室や畳、着物、床での生活に至るまで、古い伝統が伝承されている。それこそが路先生が説いた「悠久」の意

味だ。

日本文化から中国文化の大昔の痕跡を求める人は、建築関係の人だけではない。美術や工芸、織物など、様々な分野の人々は、中国古代文化の痕跡を探しに日本に来て、そして、懐かしいと感嘆する。

外国人に懐かしさを感じさせるのは古代建築に限らない。近代建築もそうだ。中国の古代建築が日本の建築文化に影響を与えたというルートと反対に、近代になると、日本の近代建築が中国建築に影響を与える方になった。

日本に来たばかりの中国東北出身の留学生に「初めてでしようから、いろいろと勝手が違って、大変でしょう」と声をかけたら、「いや、そうでもない」と返ってきた。その訳を聞くと、上野駅や東京駅周辺の町並みが自分の故郷とよく似ているから、町にはすんなり馴染めたという。その留学生は瀋陽の出身だった。

確かに、瀋陽駅(当時奉天駅)は東京駅によく似ている。赤レンガの壁に白いベルトを纏い、中央に丸いドームを載せている。そして、1階は駅舎で、2階は高級ホテルである。外見も用途も東京駅と同じである。奉天駅は戦前、その町にあった日本の南満洲鉄道附属地の最大の駅で、当時の都市計画の中心になった建物である。日本人建築家の太田毅が設計したが、彼は東京駅を設計した辰野金吾の弟子で、設計する際に、辰野によく相談したそうだ。そして、東京駅に先立ち、瀋陽駅は1911年に竣工したのだ。100周年を迎える東京駅は、現在、空前のブームになっているが、見学者の中には中国東北部出身者もいると私は覗んでいる。

逆に、懐かしさを求めて、かつて満洲に住んでいた日本人が、戦後、自分が住んでいた家を見に行くことがしばしばあった。私は瀋陽に残された日本人住宅街を調査した際、「この家は小澤征爾の生家だよ」と現在の住民が自慢げに話してくれた。1年前に、小澤氏が訪ねて来たという。

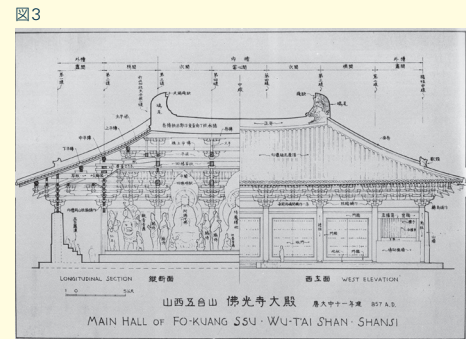
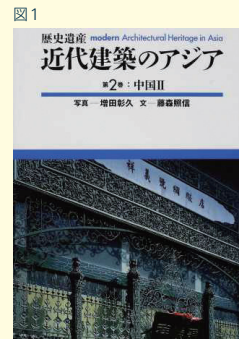


図1 / アジア近代建築全調査成果物、筆者は共著者 図2 / 奈良法隆寺金堂と五重塔 図3 / 中国山西省五台山佛光寺東大殿立面、断面図(梁思成作成) 図4 / 奉天駅(現瀋陽駅) 図5 / 戦後瀋陽に残された日本人住宅の実測図 図6 / 瀋陽旧日本人住宅内の床の間、中国人住民が観音像を飾っている。 図7 / 瀋陽に残されている日本人住宅街 見越しの松は当時のもの(2013年撮影) 図8 / U/A東京会場 各国の友人と一緒に 図9 / モンゴル人建築家、代々木にて 図10 / 『日本建築史序説』中国語翻訳版の表紙

より多くの国の人々を魅了した20世紀の日本建築の第1候補は、紛れもなく国立代々木競技場であろう。2011年9月に東京で開催されたU/A大会(第24回世界建築会議)の会期中に、世界から来訪した多くの建築家が、国立代々木競技場に足を運んだ。私もモンゴル、中国、タイ、オーストラリア、アメリカなどから来た友人を連れて、国立代々木競技場を案内した。原宿駅を出ると、早く競技場を見たい一心で、友人たちは足早になった。そして、人それぞれの代々木競技場にまつわる思い出を聞かせてくれた。中国の有名建築家は感慨深そうに競技場を眺めて、「僕と同じ年だ。でも、現在見ても前衛的だ。

ユニークさは全く失われていない。」と興奮覚めやらぬ様子で語った。モンゴルの若い建築家はカメラを持って競技場を走り回り、隅々まで写真に収めていた。聴けば、卒業研究の対象だという。これまでは、図面や模型などで建物をイメージしていたのだそう。また、アメリカの友人は、大学で1960年代のメタボリズムを教えているが、質問が次々と飛び出てきた。オーストラリアの友人も、現在、博士論文を執筆中で、丹下健三は研究対象になっているからと熱心にメモを取っていた。

1つの建物にこんなに多くの国の人々が引き寄せられて、それらの人々の忘れがたい思

い出になっていたことに衝撃を受けた。これこそ建築の持つ文化力に他ならない。今度の2020年東京オリンピックでは、世界の人々を熱狂させる斬新で、懐かしい建物が、また出現するのだろうか。

そうした中で、アジア建築史、都市史を研究してきた私ができることは何であろうか。隣国同志の建築に対する相互理解を深めたいと願い、太田博太郎が著した名著『日本建築史序説』を恩師の路先生と共同で翻訳し、昨年10月に上海で出版した。日本建築に寄せられる懐かしさの由来を少しでも知ってもらえたらと願っている。